天理教 江南支部だより

発行先　江南支部
発行日　立教188年１２月1日
発行責任者　九里正昭
発行住所　甲賀町神1750番地の１
１２月号　N0305

教祖百四十年祭

第5回 ようぼく一斉活動日開催

江南支部は、11月1日甲龍分教会を会場に「第５回ようぼく一斉活動日」を開催した。最終回となる今回は、演劇「扉ひらいて」を鑑賞した。明治20年陰暦正月26日、教祖が現身をお隠し下され、扉を開いて存命の理をもって世界ろくぢに踏み均しにお出ましになられた前後の先人の姿を臨場感あふれる演技で現わされ、当時の先人の思いや教祖が今なお存命でお働きくだされているということを改めて感じさせていただいた。

前日、支部の係員が会場や駐車場の準備につとめたが、午後より激しい雨となり、心配されたが、当日は丁度良いお天気の御守護を頂き、３カ所のスクリーンに映像を流し、アンケートによる感想もほとんどが素晴らしかったというものであった。

残りわずかとなった年祭活動を最後まで勇んでつとめさせていただこう誓いを新たにして閉幕した。

前日より準備にあたる

朝の信仰読本　中山慶純著

〝心の傷〟が性格をつくる

本部神殿へ参拝に行ったときのことです。石段を上って、靴を脱ごうとしたところで、礼拝場から下りてきた男性と目が合いました。その人が、こちらに向かってスッと手を伸ばしてきたので、「知ってる人だったかな？」と思い、私もとっさに手を出しました。ところが、男性は「あんたじゃない」という感じで私の手を払いのけて、後ろにいた境内掛から靴べらを受け取ると、靴を履いてさっさと行ってしまったのです。

「違うなら違うと、口に出して言ってくれたらいいのに。意地悪な人もいるもんや」と、少し腹立たしい気持ちになりました。でも、そこでこうも思ったのです。「あの人は、心に〝傷〟を負っているんやな」と。

人間には、いろいろな性格があります。優しくて温厚な人もいれば、人当たりのきつい意地悪な人もいる。まさに十人十色（じゅうにんといろ）です。そのなかで、周囲から敬遠され、陰で「あの性格、直せばいいのに」などと言われるような人の振る舞いは、いわば〝心の傷〟の現れなのです。

人間はみな親神様の子供ですから、本来、とてもきれいな心を持っています。それが、生まれ替わり出替わりを繰り返すなかで、楽しいことやうれしいことだけでなく、悲しいことや悔しいことなど、さまざまなことを経験します。そのつらい経験が心の傷となって残るのです。「ひどい性格だな」と思われる人ほど、負っている傷は深いのだと思います。

体の擦（す）り傷や切り傷なら、消毒して絆創膏（ばんそうこう）を貼っておけば、いずれ治ります。しかし、心の傷は自覚していても自分で治すのは難しい。そのまま放っておけば、どんどん深くなるばかり。治療には、周囲の人たちの手助けが必要です。

だから、今後は「あの人、性格悪そうやな。私の嫌いなタイプや」などと感じても、「きっとどこかで大きなケガをしたに違いない」と思い直して、「なんとかして心に絆創膏を貼ってあげたいな。どんなふうにどんなふうに声をかけたらいいのだろう」と、たすけ心をもって接してほしいのです。

私をはじめ、みなさんにも、それぞれ性格があります。もしかしたら、気づかぬうちに人に迷惑をかけたり、嫌な思いをさせたりしているかもしれません。そう思えば、たすけ心はおのずと湧いてくるはずです。

心の傷を治すのは、温かい、優しい、そして心を勇ませる言葉です。たとえ相手からひどいことを言われたりされたりしても、大きな心で受けとめ、傷口をふさぐ方法を、その人の身になって考え、手当てをしていただきたいと思います。

『みちのとも』より一すいい話

愚直に「ひろめ」に心を尽くし

石田隆通　隆初分教会長

平成4年10月から4年半、大阪府高

石市内に一室を借り、幼い子供たちを連れて、夫婦で単独布教をしたことがあります。

歩けども歩けども、にをいは掛からず、「いい若い者が何をくだらないことを。働いて税金を納めたほうが、よほど人助けだ」という罵声にくずおれそうになることもありました。月日は1年、2年とむなしく過ぎ行くばかり。いままさに教祖のひながたをたどっているのだと自らを鼓舞するものの、成果の挙がらない日々に疲れ、いら立つことさえありました。

そんなある日、教友に誘われて和泉市の市民セミナーに参加しました。講師は某大学の社会学の先生で、「死」をテーマに1時間余り講演されました。

話の途中で突然、「この中に天理教の信者さんはいますか？」と尋ねられました。私と教友が手を挙げた後、先生は「私は天理教の信者ではありませんが、参考までに話します。日本人は長らく、死を穢(けが)れと考えてきましたが、天理教の教祖は、穢れではなく『出直し』と表現し、魂の生まれ替わりを説きました。歴史上、画期的なことです。もう少し付け加えると、天理教の教祖は、女性の生理と出産についても穢れはないと教えています。おそらく日本史上初めて、世界史的に見ても、類いまれな女性解放論者です。お二人は、偉大な教祖を戴(いただ)いて幸せですね」と。

この瞬間、私は「神様はある」という確信に心が震えました。教祖はこの先生を通して数十人の聴衆ににをいがけしてくださったのだと思うと、ありがたくてうれしくて、溢(あふ)れる涙を何度も拭いました。誰も耳を傾けてくれない日々を、教祖はご覧くださっていたことを確信しました。笑われ謗(そし)られ拒否される日々こそ教祖のひながたなのだと心に治まりました。

この経験が、私のにをいがけの原点となりました。にをいが掛かる掛からないは神様にお任せして、ただ愚直に「ひろめ」に心を尽くせばよいのだと吹っ切れました。

私の年祭活動のスローガンは、内にも外にも「いつでもどこでもにをいがけ」です。あらゆる機会を利用して神名を広めることに心を砕く、その積み重ねが「おたすけ」につながるのでありましょう。

滋賀教区災救隊訓練を実施

滋賀教区災救隊は、10月29日、30日の両日、高島市朽木のグリーンパーク想い出の森を会場に本年の訓練を実施し、木の伐採、草刈り作業を行った。支部からは、4名が参加した。

第60回 献米団参及び親里の集いを開催

11月26日、本部月次祭に併せ、滋賀教区は第60回となる「献米団参及び親里の集い」を開催した。

午前８時ごろより、各支部からの献米が炊事本部へ運び込まれた。トラックの献米はひのきしん者の手により降ろされ、所定の場所に積み上げられた。

今年はコメの値段が高騰し、献米の量が心配されたが、例年とほぼ同じ量の献米が供えられた。江南支部からは、玄米785キロ、白米10キロ、現金１，１００００円が供えられた。

午後からは、おやさとやかた５講堂に会場を移し、「親里の集い」が開催され、講師に道友社社長、山名大教会長 諸井道隆先生の講話が行われ、お道の素晴らしさ、にをいがけ、おたすけの大切さを教えていただいた。

親里の集いには、約２５０名が参加し、先生の話に熱心に耳を傾けた。いよいよ残りわずかとなった年祭活動を悔いの残らぬようつとめさせて頂こうと決意を新たにした。

10月27日、本年最後となる支部ひのきしんを鹿深の家で実施。草刈りに汗を流した。

毎年、春から秋にかけて主に草刈りを中心にひのきしんを行っている。

施設側からも期待され、喜んで頂いている。来年も実施の予定、一人も多くの参加をお願いします。